

## 第1節 平成29年度 資料館における展示・情報公開活動

### 1. 第38回企画展『大きさをくらべ～大きいモノと小さいモノ～』

多くの公立・私立博物館では夏季に「家族(子ども)向け」特別展や企画展を開催し、夏休みの自由課題に資するとともに集客に努めているようであるが、昨今の総合系(歴史民俗系と自然史系を有する)博物館においては、その内容が自然史系に偏っているように感じられる<sup>註1</sup>。歴史系特別展を開催する博物館は少数派となっているのが現状と言えるのではなかろうか。

一方、本学では8月上旬から9月下旬にかけて夏季休業となることから、オープンキャンパス開催当日以外は、当館展示室も開店休業状態となることが常となっており、夏場の電気代など運営面の点からも問題視され続けてきた。その打開策として、肩身を狭くして退屈な夏休みを送っているであろう歴史好き少年を元気づけるために、初の子ども向け展示を企画することとなった。

展示では「大きさ」をテーマとし、縄文時代から古代にかけての鏃、弥生土器壺と弥生土器壺棺、石包丁と大型石包丁、土師器とミニチュア土器などを素材に、同じ形態でなぜ大きさが違うのかについて解説を行った。解説パネルは通常より文字数を大幅に減らし、漢字にできるだけふりがなを振るなど、百折不撓であった当館の展示コンセプトを大転換した上での開催であった。

7月18日(火)から9月15日(金)まで、約2ヶ月の会期中、527名もの方々に観覧いただきましたが、結果的に約半数はオープンキャンパス開催時の入館者(高校生および保護者)であり、残念ながら小中学生の見学は数えるほどであった。入館者からは「(道具の)大きさの変化から生活様式の変化が分かることが面白い」「祭祀用の道具はいかにも祭祀用という感じがした」などの声や、「見過ごされがちだけど大切なモノ・コトを展示して欲しい」とのメッセージが寄せられた。初の子ども向け展示は課題を多く残したが、学生が不在となる夏季の展示開催は、やはりターゲットをより明確化することが重要と考えている。

#### 【註】

1) 平成29年度における山口県内夏季特別展・企画展の状況は、山口県立山口博物館にて『アリスと大冒険 3Dふしぎ博物館』、萩博物館にて『驚異の遭遇！未確認生物』が開催されていた。近隣県の状況を見ると、鳥取県立博物館では『つばさの博覧会 - 巨大翼竜からペンギンまで -』が、北九州市立自然史・歴史博物館では『大昆虫博』が、宮崎県立総合博物館では『日本南極観測60周年記念 南極展』が、徳島県立博物館では『ザ・モンスター～海と陸のへんてこ生物たち～』が開催されていた。



写真1 企画展ポスター



写真2 展示の様様

## 2. 第39回企画展『40年の歩み～館蔵名品展～』

本学は、かつては山口市の通称パークロード(県道203号線)周辺や下関市長府に各学部が散在する状況であった。昭和41年(1966)には山口市吉田地区への統合移転が開始されるが、造成工事中に地下から埋蔵文化財が出土したため、翌昭和42年(1967)に学長を団長とする山口大学吉田遺跡調査団が組織され、本格的な遺跡調査が始められることとなった。

統合移転は昭和48年(1973)にひとまずの終了を迎え、その間に出土した資料や調査記録を保管するため、昭和52年(1977)に当館が竣工し、翌昭和53年(1978)に構内遺跡調査要綱が制定され、本学の調査が正式に当館に引き継がれた。以降現在に至るまで、当館が本学の埋蔵文化財保護の重責を担い続けてきたのであるが、平成29年度が40周年にあたることから、『40年の歩み～館蔵名品展～』と題して企画展を開催することにした。

当館の収蔵品は、昭和41年出土資料を最古とし、毎年増加し続ける「山口大学構内遺跡関連資料」と、本学教育学部教員であった小野忠熙氏が、主として昭和20年代後半から40年代前半にかけて県内各地で調査を担当した遺跡から出土した「山口県内考古資料」に大別される。それらの中から特に歴史的価値や希少性が高いものを選定して展示を構築した。具体的には吉田遺跡出土品として竹製網代編み製品(弥生時代)、ガラス小玉(弥生時代)、滑石製模造品(古墳時代)、音義木簡をはじめとする官衙関連資料(古代)を、県内考古資料として潮待貝塚(下関市)出土貝輪(縄文時代)、美濃ヶ浜遺跡(山口市)出土子持勾玉(古墳時代)、筈倉古墳(山口市)出土銅地金・銀貼り耳環(古墳時代)、多々良廃寺跡(防府市)採取瓦(古代)、見島ジーコンボ古墳群(萩市)出土金属製品(古代)などである。

10月21日(月)から2月2日(金)の会期中、438名もの方々に観覧いただいた。アンケート調査の集計では、「一番印象に残った資料」の回答として、ガラス小玉や耳環などの美しい装飾品を押さえて、風趣漂う竹製網代編み製品が首位であったことが驚きであった。

「あれから40年…」という漫談家のフレーズがあるが、貴重な考古資料を無事40年間継承できたという感慨とともに、さらなる40年に向かい決意を新たにできる機会となった。一方で「山口大学構内遺跡関連資料」や「山口県内考古資料」には公開が行えていないものを数多く含んでいる。一般への展示公開より優先されるべきは資料の調査研究・学術公開であり、眼前の課題を再認識させられる機会にもなった。



写真3 企画展ポスター



写真4 展示の様相

### 3. 山口県大学ML連携特別展『やまぐちの大学～University College Yamaguchi～』に参加

山口県内の大学博物館(Museum)と図書館(Library)による広域連携事業が開始されたのは平成25年度のことである。以降、毎年参加館が共通テーマに沿って各大学の特性を生かした学術資料や教育研究成果を公開する特別展を開催してきたが、5年目を迎える平成29年度は、初の合同展示を山口県立山口博物館(以下「山口博物館」)にて開催することとなった(写真5・6)。

当館は山口県内の数少ない大学博物館施設として、梅光学院大学博物館とともに事業開始期から参加しており、事務局を務める本学図書館員とともに未参加館への事業内容説明や参加要請、特別展ポスター・チラシの作成、開催期間中の各館視察、事業報告書の編集など中心的な役割を担ってきた。5周年合同展示を迎えるに当たり、会場となる山口博物館との調整、関連事業として開催されるシンポジウムの準備を行うと同時に、県内全大学参加をめざし、未参加館へのさらなる声かけを行い、徳山大学図書館と山口短期大学附属図書館の初参加にこぎ着けた矢先、当事業の創設メンバーであった梅光学院大学博物館と図書館の不参加が決定され、結果的に全大学参加に1大学足りない13大学17館での開催となったことが悔やまれた。

今回の特別展は共通テーマが設けられず、出展は参加館の自由に委ねられたため、当館は近年の発掘調査成果で注目を集めている「吉田遺跡古代官衙関連出土資料」を出展した(写真7・8)。他の参加館は、所蔵学術資料のほか大学史資料や教育研究成果の紹介、学生の卒業作品などを出展しており、多様性に富んだ内容となった。11月25日(土)から12月24日(日)までの1ヶ月の会期中、山口博物館からの要請により団体見学への展示解説を行い(写真9)、土・日・祝日は参加館の持ち回りで会場当番を務めるなど多少の負荷はかかったが、約600名の方々に観覧いただくことができた。合同展示の開催に全面的に協力いただいた山口博物館館長や学芸員をはじめとする関係各位、共催組織(大学リーグやまぐち、山口県大学図書館協議会)、後援組織(大学博物館等協議会、山口県博物館協会、山口県図書館協会)にお礼申し上げたい。

また、関連事業として12月10日(日)の13時から山口県立図書館レクチャールームにて開催されたシンポジウム『あなたの街の大学博物館・図書館～目的と役割、現状と未来～』にも参加した。シンポジウムでは、山口県大学ML連携事業実行委員会の根ヶ山徹委員長(当館館長・本学図書館長)の代表挨拶に続き、筆者が連携事業の経緯を説明した(写真10)。その後、吉光紀行氏(梅光学院大学特任准教授)と清水則雄氏(広島大学総合博物館准教授)により基調講演が行われ、本学総合図書館、山口県立大学図書館、至誠館大学附属図書館、下関市立大学鯨資料室、そして当館による事例報告が行われた。意見交換では、その他の参加館の現状、大学博物館と図書館の特性や大学関係者以外へのサービスの状況、公立博物館・図書館との連携状況などが報告された。その後、将来の展望に関する意見が述べられ、意義のあるシンポジウムとなった一方で、会場からは「一般の人は大学にどのような資料があるかを知らない」「世間の人は地域貢献をはじめとする大学の様々な取り組みを認知・認識していない」など厳しい声も寄せられ、広報の重要性についても言及があった。

博物館は使命としてその4大機能(収集・保存管理・調査研究・教育活用)を果たすが、大前提としてそれは継続的なものでなくてはならない。設置者が行政、法人、私に関わらず、予算の縮小や人的配置の不備を原因にその継続性が不安視されることこそが問題と感じている。事業広報の巧拙が博物館の寿命を定めてはならないし、新規事業の構築や開催に年中汗を流し続ける学芸員はもはや学芸員と呼べないだろう。当館では、開催を主催または支援する事業に対しては、最低10年の継続を目安としているが、社会への定着と事業内容の充実・安定化を考慮すると、10年でも短期間と言えるのではなかろうか。



写真5 会場となった山口県立山口博物館



写真6 開会式の模様



写真7 展示の模様



写真8 当館の展示



写真9 団体見学での展示解説



写真10 シンポジウムの模様

#### 4. 第6回山口大学学術資産継承事業成果展『宝山の一角』を共催にて開催

全学委員会である山口大学学術資産継承事業委員会(以下「委員会」)は、本学に所蔵される各種学術資料の長期的な保存継承プランを策定、提案するとともに、その下部組織である博物、文書・典籍両専門部会が、資料の実質的な保存および管理活動を行っている。当館は、平成24年度より委員会が主催する事業成果展『宝山の一角』の共催館として、展示空間の提供と展示設営の協力、会期中の管理運営などを行っている。

平成29年度も例年どおり前期・後期の2部構成で、前期展は平成30年3月19日(月)から5月18日(金)まで、後期展は5月28日(月)から7月20日(金)までの会期で開催された。当館は、前期展にて保存処理事業を終えた吉田遺跡出土の古代官衙関連木製品を出展した。

前期展では、文書資料として康熙御製『耕織図誌』(焦秉貞画 佩文齋刊)(経済学部東亜経済研究所)、鉱物・岩石資料として山口県の火山と火山岩(理学部地球科学標本室)、美術資料として寺池厚志作品(教育学部美術教育教室)、商品資料として星里焼(下関市)(経済学部商品資料館)、民俗資料として糸繰車・座繰りなど(農学部)が、後期展では文書資料として近現代東アジア関連資料(経済学部東亜経済研究所)、考古資料として山口県出土経塚関連資料(人文学部)、鉱物資料として熊野鉱山(萩市)の研究成果及び昭和初期の鉱山写真(工学部学術資料展示館)、生物標本資料としてテン・アナグマ・キクガシラコウモリ・コウベモグラなど山口県の哺乳類交連骨格標本(共同獣医学部)が展示された。

前期展は4月14日(土)14時より、後期展は6月2日(土)14時よりミュージアムトーク(展示解説)を開催した(写真11・12)。両日とも学内外とわず多くの参加者を迎え入れたが、特に後期展では所蔵学部の大学院生が解説を行ったこともあり、和気藹々とした雰囲気となった。

前期展では650名、後期展では464名、総数1,114名もの方々に観覧いただいた。観覧者からは「山口ゆかりのアーティスト作品展を開催して欲しい」などの要望のほか、「学生生活に関連した展示」を希望する声も寄せられた反面、「大学在校生2名が同時に観覧していましたが、態度が悪くあきれました。こんなところしつくて!(ママ)」という指摘もあった。当展は新入生ガイダンスや授業の課題として活用されることが増えており、展示品が「知の探求」への第一歩となれば望外の喜びであるが、教育施設や公の場での最低限のマナーは中等教育までに学んで欲しい、と感じるのは大学の非常識なのであろうか。



写真 11 前期ミュージアムトークの様相



写真 12 後期ミュージアムトークの様相

## 5. 平成29年度刊行物

### 1. 『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成25年度－』

平成29年度末に、平成25年度に実施した構内遺跡発掘調査概報と資料館活動報告を所収した年報を刊行している。発掘調査概報としては、本発掘調査2件(吉田遺跡:獣医学国際教育研究センター新営工事、吉田遺跡:第1武道場耐震改修その他工事)、予備発掘調査1件(白石遺跡:教育学部附属山口中学校武道場新営工事)、工事立会12件(吉田遺跡9、白石遺跡1、御手洗遺跡2)の成果が報告されている。

館の活動報告としては、展示・公開活動として3件の展示事業と3冊の刊行物を、社会教育事業として1件の公開授業を報告している。そのほか、横山と吉田生物研究所による「吉田遺跡出土の網代編み製品と植物遺体の樹種同定」、横山による「吉田遺跡出土の「千字文」音義木簡略報」、川島尚宗による「山口県宇部市月崎遺跡出土資料について」と題する付篇を所収している。

### 2. 山口大学埋蔵文化財資料館通信 第28号『てらこや埋文』

平成18年(2005)より刊行を開始した広報誌であり、当初季刊であったが、平成23年度以降は年度末に1度の刊行となっている。当館の年報が数年遅れで刊行されていることから、速報性のある広報誌として重要な役割を果たしている。

巻頭頁は当該年度に着手した吉田構内福利厚生施設新営工事に伴う予備・本発掘調査の速報を、2頁から3頁には展示活動、4頁には山口県立山口博物館との共済事業「講座 古代ウォーク」を、5頁には平成29年12月4日に一般公開を開始した「学術資産継承事業 考古資料データベース」(<https://knowledge.lib.yamaguchi-u.ac.jp/arche/>) 関連記事を、6頁には当該年度に開催した展示アンケート結果を、7頁には「資料館この一品」として山口大学医学部構内遺跡出土の鐘崎式土器(縄文時代後期中葉)の紹介記事を、巻末頁には当館の当該年度活動歴を掲載した。

当広報誌は、当館ではもちろんのこと、冊数は少ないものの県内博物館施設にて無料配布していたており、県立図書館などにも収蔵されている。そのほか、考古資料データベースと同時に正式公開が開始された「山口県地域学リポジトリ」(<https://knowledge.lib.yamaguchi-u.ac.jp/ja>)にてデジタル版が公開されている。



写真 13 平成 29 年度埋蔵文化財資料館刊行物